

C21a 天文学史研究を日本天文学会はどう取り扱うべきかの考察と検討

縣秀彦, 大島紀夫, 臼田-佐藤功美子 (国立天文台), 中村士 (平成帝京大), 鷹弘道 (平塚市博物館), 小石川正弘 (仙台市図書館), 松尾厚 (山口県立博物館)

諸報告によると一般市民の歴史や文化財への関心は高く、天文学史資料を扱っている博物館や科学館への入館者数、時代小説「天地明察」などへの関心、さらには国立天文台の文化財に関する講演会への参加希望者数が、最新天文学に関する講演と差が無い点などからも天文学史は国民にとって興味の対象であることが分かる。一方、学術研究においても数十年から数百年前のデータアーカイブから新しい知見や発見が導かれることがある。このように、今日の日本の天文コミュニティにとっても、天文学史とその資料収集・調査・研究は維持・発展していくことが求められる研究分野と考えられる。

諸外国においても特に欧米は天文学研究の歴史的資産を収集・保存・研究・公開しており、それらの活動が次世代の研究者を生む要因や、国民が天文学研究の推進を支持する要因となっている。IAUにおいても Division C の Commission 41 が History of Astronomy であり、教育やアウトリーチと並んで重要な研究テーマと位置付けられている。一方、日本においても、博物館法が2008年6月に改正され、公開天文台やプラネタリウム館のような天文系の生涯学習施設も博物館法の適用範囲（条件があれば登録可能）となった。

科学教育や科学技術社会論または科学コミュニケーション研究においても、市民や子どもにとって個人の文脈としての天文学史へのアプローチは貴重な科学リテラシー構築の機会と捉えられているので、貴重な資料や研究成果が散逸しないよう日本天文学会が扱う研究の範疇として今後は考慮されることが望まれる。